

「また同僚と喧嘩したの？」

顔を腫らして歩いていたリバイスに、ルーシュが声を掛けた。リバイスとルーシュの家は近く、この辺りにはほかに民家がない。農牧の地域である。幼馴染のふたりは、互いの両親に見守られながらも、甘酸っぱくもどかしい関係を長く続けている。

ルーシュの、この呆れに近い台詞は、リバイスにとって「からかい」に値するものだ。

「うるさいな……だって怠けてるんだもんよ、注意したら喧嘩になった」

「処分は？」

「一日飯抜きだった」

「それで済んでよかったんじゃないの。じゃあお腹空いてるでしょ。これあげる」

ルーシュは、腕いっぱいを持っていたカゴの中から、採れたばかりの果物を差し出し、笑った。茶色く、線の細い髪の毛が風に揺れ、夕日に照らされて光っている。

「別に家に帰りゃ飯はあるんだけど……ま、もらっとくわ。ああ、それよりさ、今度あれ、ミートパイ作ってくれよ」

「ちょうど明日、牛のミンチを作るよ。明日は休日でしょ？ よかったら来てよ」

「明日かあ。寝たいけどなあ。まあ気が向いたら行くわ」

「うん！ 待ってるね」

リバイスは家に帰り、母親からも同じように顔のアザについて突っ込まれ、また悪態をついた。この地域で唯一の、小さな城の近衛兵をやっているリバイスは、素行がいいとは言えないが正義感が強く、少し天邪鬼な性格をしている。母親が食事を用意してくれている間、ベッドに寝転びながら、ルーシュにもらった林檎を齧った。

本当は、ルーシュが作るミートパイが好物で、明日食べられるなら今日の夕飯ごとき抜いてもいいと思っているくらいである。気が向いたら、なんて言ったけれど、何時に行こうか、いや、それよりミンチの作業は力仕事なので、適当に口実を作って早く行って手伝うか、なんて考えていた。

翌日、リバイスは、寝過ぎたから身体を動かすという言い訳を持って、昼過ぎにルーシュの家に行く。

「おばさん！ おはよう！」

元気に、勝手に家の扉を開けると、ルーシュの母が「ルーシュなら畑に行っているよ」と、優しく教えてくれた。

「ミートパイを食いに来たんですよ」

「はいはい、そうね。まだミンチの作業をしていないから、ルーシュをそろそろ迎えに行ってくれる？」

「はい」

ルーシュの家の隣の納屋に、ミンチの機械が置いてある。いつもは布が掛けてあるそれが裸になっているのを見てから、だらだらと畑に向かって歩いた。広大な土地に、高い位置から太陽の光が差し込み、農作物が元気に育っている。林を越えると、地平線が見えるほど畑

が広がっているのはいいのだが、いるはずのルーシュの姿は見えない。

「いねえじゃん」

林檎の木の下に、ルーシュがいつも使っているブリキのバケツが置いてあるのを、リバイスが拾い上げた。

リバイスがバケツを拾い上げる三十分ほど前のこと。ルーシュは、バケツに水を入れ、野菜の収穫に行こうとしていた。キリキリと金属が擦れる音がするので、そろそろバケツを新調しなければいけないな、なんて思いながら歩いていると、突如思い出す。ミートパイに使うナツメグは、家の畑では育てていないのだ。ここから少し離れた、知り合いの家に少しだけもらいに行こうと思いつき、バケツを置いて、畑とは逆方向に進んだ。

ルーシュの家もリバイスの家も見えなくなったころ、勢いのある馬の蹄の音がする。もっと栄えた土地ならいざ知らず、この辺りは、見知らぬ馬車が通ることなどないので、ルーシュは怪訝な顔をして振り向いた。

走りざまに、馬車から男の顔が覗いた。勢いのある荷車から半身を出した男の腕は、ルーシュに向かってくるのではないか。

「えっ？」

ほんの、小さい声しか出なかった。誰にも届かないような声だけ、ルーシュが立っていた場所に残る。太い腕で腹部を抱きかかえられたルーシュは、引き摺り込まれるようにして、そのまま馬車に乗せられた。抵抗をする暇などなく、馬車の扉は閉まり、狭い荷車の中に閉じ込められてしまう。

ルーシュは、状況の理解こそできていないが、ただ恐怖だけはあったので、息を荒くしながら目の前の男を凝視する。

「な、なに、なんですか……っ」

男は、ルーシュの前髪を手でよけ、顔を全部眺めてから「こりゃ高く売れる」と、言った。

「う、売れる……？」

驚愕起因で胸が上下していただけのルーシュの身体は、徐々に熱くなり、心臓の鼓動が大きくなる。

「い、いやです、お願いっ！ 家に帰ります！」

「あれだ、あの公爵がいい！ 絶対に高値で買い取ってくれる！ 見たところ、十五か十六、いっても十八だろ。こんな田舎じゃあ、処女に決まってる！ べらぼうにふっかけられるぞ」

ルーシュの否定など虚しく、男は嬉々として、馬の手綱を引く仲間に声を掛けていた。「そりゃいい」と、御者も半笑いで答えている間に、ルーシュは麻袋を被せられ、上半身を縄で縛られた。

質のよくない麻は籠り、ルーシュは、自分の震えと息の荒さを嫌というほど聞き続けるしかなかった。

ルーシュの麻が取り払われたのは、冷たい床の上だった。正座に近い姿勢だが、やや腰が上がり、偉人に謁見する罪人のような格好で、まさしく両腕も背中で縛られている状態である。ヒビがひとつもない、つるんとした灰色の床の上で、ルーシュは、すぐに顔を上げられなかった。空気感で悟ったのだ。ここは、自分が足を踏み入れたことなどない、高貴な場所である。

「顔をあげよ」

広間に、重厚感のある男の声が通る。少し反響した。ルーシュがすぐに動かなかったので、隣に立っていた、奴隷商人という名を持つならず者は、ルーシュを縛っている縄の端を引っ張った。秒数にして、約二十ほど。ルーシュが恐る恐る顎をあげると、まず、見知った国旗と、壁に直接掘られているエンブレムが目に入る。鉄の太い棒にぶら下がる赤い旗に描かれた金色の紋章は、ルーシュの住む国とは敵対関係にある、隣の帝国のものだ。

馬車に揺られ、それから別の馬車に乗せられ、麻袋の中で何も理解できぬまま、ルーシュは国境を超えていたのだ。戦争自体は落ち着いている現状ではあるが、簡単に超えてはならない堺である。ルーシュには責任はないのに、密入国の罪悪感に絶望をできてしまっていると、玉座のような大層な椅子に座った男が、肘をついて横柄にしていた態度を変え、前のめりになってルーシュを見つめた。

「気に入った！ 最高だ、よくぞ引っ張ってきたな！ 多く払おうじゃあないか」

「ありがとうございます、ありがとうございます！」

ルーシュの隣に立つ商人が、何度も頭を下げている。ルーシュは、自分は奴隷になるのだ……という現実を漠然と理解したが、実感はなかった。怖い、早く帰りたい、誰にお願いをすればいいの、と、帝国の中核付近の残酷さをまるで知らない、「脳天気」なことを考えていた。

ルーシュを買い取った公爵の男は、この帝国内での権力者である。二番手と言えほどの脅威であり、悪徳で、人の上に立つ快感が三代欲求よりも勝るような下衆であった。豪華な服を重ねて纏うが、筋肉の太さが目立ち、どこか似合わなさがある。威厳のために髭を多く生やしているけれど、貴族衣装を脱げば野蛮な肉体労働者とでも間違えられそうなほど、がっしりとしていた。よい食品だけを食べて肥え続けるほかの爵位の男たちと違い、個体での強さを誇示できていると言え、聞こえがよい。

そんな男爵が、椅子から降り、ルーシュの目の前に歩いてきた。ルーシュの目線に、ちょうど男爵の股間がやってくる。

「女、名はなんと申す」

「……ルーシュです。ルーシュ・グリッター」

「私はジャイロ。ルーシュ、貴様は今から私の傀儡となるだろう」

傀儡。ルーシュの頭には、そんな単語は存在しなかった。奴隷を言い換えたものだろうかという考えのまま、威圧的な男の物言いに反抗することすらできず、頷いてしまう。これが、魔術の発動条件だということも知らないまま。

夜までの間、ルーシュは暗い部屋に閉じ込められていた。手足に拘束はなく、今まで着ていたものよりもいい生地の衣服を投げ込まれ、着替えるように指示される。格子の窓が頭上高くに設置されているだけで、あとは石壁しかない部屋である。

怖い、寒い、誰か助けて。ひとりで震え、怯えて、涙を流しては呆然とし、また泣いていた。けれど、生きていれば生理欲求はある。そろそろ尿意の我慢ができなくなっていたころ、扉が開けられる。小間使いと見られる男が、無言でルーシュを促し、狭い部屋から出した。

「あの……お、お手洗い、に……」

ルーシュが小さな声で話しかけても、男は振り返ってくれない。ただ「ついて来い」と言うだけで、そのほかの会話はないうまま、両開き扉のある部屋に入れられた。入った途端に閉められてしまい、小間使いの男が廊下を去っていく足音がする。ルーシュの家ほどあろう、広い部屋には、複数のベッドが置いてあった。天蓋付きのものもあれば、質素なものも。部屋の中央にて、にこやかに見える暗黒の微笑みで待っているジャイロが、ルーシュを手招きする。

「近くに來なさい」

「あのっ、その……先に、お手洗いに……」

目力を発揮しながらにんまりと笑った男は、便所がある方向を指差す。ルーシュは、急いで走って行きたいのだが、尿意を我慢しすぎているはしたなさを男に見せるわけにもいかず、もじもじと内股気味に早足になった。膀胱が破裂しそうなほどなのだ。やっと便所の扉を開け、閉めようとする、その扉はジャイロに抑えられてしまった。

「ああっ！ あの、すみません」

「早くしなさい」

「……う、うう、あ」

奴隷とは、排尿をしている間も監視されるものなのか。ルーシュは、奴隷の生活についてよく知らなかった。まだ社会知識も浅い十六歳なので当たり前である。ただ、とにかく羞恥心だけは大きく、そして位が高そうな男の前で、そんな汚いことをしてはならないという健気さもあった。

「ごめんなさい、ごめんなさい……」

さまざまな想いをもちながらも、とにかく早く放尿がしたいことには変わらない。何度も謝りながら、内股気味に下着をおろし、便器に座った。プシャア！ と、大きな音からはじまり、勢いよく出てくる尿が、便器の底に当たってジョロジョロと鳴る。

「あ……は、ああ……」

溜まっていた尿が出ていく爽快感。こんな感覚があったなんて、ルーシュは今まで実感したことがない。膀胱がスッキリすると同時に、心が晴れやかになるような気持ちよさがあった。思わず、口元が緩み、半開きになってしまう。

「どうした？」

なんともわざとらしく、ジャイロは、ルーシュの顔を覗きこんだ。ルーシュの肉体感度を強制的に強くしたのは、ジャイロ本人なのだ。厳密に言えば、性的な感度だけではなく、五

感すべてが研ぎ澄まされるような魔術であるが、こと性感度には、そりゃあもう、顕著に効果が表れる。

「あぁっ、すみません……申し訳ございません」

恍惚と言えるくらいの表情を披露していたルーシュは、ジャイロの存在を思い出し、急いで服を着た。

便所を出て、広間に戻ると、ジャイロはルーシュに衣服を見せる。黒い下着の上下に加え、ベビードール、ニーハイソックス、チョーカーまで用意されていた。

「体内に何か隠しているかもしれん。着替えよ」

「何も隠してなんかいません」

目の前で着替えなければならないことに抵抗を覚えたルーシュは、そう伝えたが、じっと動かないリバイスの重鎮感を見て、すぐに「ごめんなさい」と言った。今更ながらに、逆らったら殺されるかもしれない、という不安が大きくなったのだ。もう、リバイスにも、両親にも会えないかもしれない。そんな不安が頭をよぎる。

「ふ……うう……」

ルーシュの目から大粒の涙が落ちる。出る嗚咽を必死に抑えながら、ルーシュは衣服を脱いでいった。ワンピースを頭から抜く際、ルーシュの視界が、布地で遮られる。次に頭を出したとき、ルーシュと身体を密着させるくらいの距離に、ジャイロが寄ってきていた。

「はっ、あ」

驚き、ビクンと肩を震わせたルーシュは、手の動きを止めてしまう。大きな躯体が、ルーシュを覆うようにして凜と立ち、見下ろしているのだ。

「身体検査をしよう」

ルーシュの手に残っていたワンピースが引き抜かれた。下着姿の彼女をまじまじと見つめたジャイロは、恐怖で大きく上下する彼女の胸に視点を合わせる。ゆっくり手を伸ばすと、ルーシュは息を飲んだ。

「何か武器があったら困るからな」

そう言いながら、固まっているルーシュのブラジャーに手をかけた。布地の上から、太い指で揉みほぐす。

「あ、ふぁッ」

当然、恥ずかしい部分を触られたことなどないルーシュは、自分が性的な対象になることの恐怖を感じ、顔が引き攣った。しかし、それも数秒で終わってしまう。ジャイロが手のひらを乳房に押し付け、指の先を乳肉に食い込ませるたびに、ぞわぞわとした熱さが上ってきたのだ。ルーシュは戸惑い、思わず自分の胸を凝視する。すると、プルンとブラジャーを剥かれた。生の乳房が外気に触れる。その多少の刺激だけで、胸の中心部がジンジンとして、みるみるうちに、乳首がツンと立っていく。ジャイロがその乳首に親指を乗せ、擦るように押しつぶした。

「……くっ、う」

ルーシュは唇を噛んだ。自分の身体に何が起きているのか、理解できていない。

「なんだ？ 感じてるのか？ 随分と淫乱だな？」

「い、いんら、ん……」

顔を真っ赤にしたルーシュは、左右に首を振って否定した。健気な反応に、ジャイロは口角が上がってしまう。こういう、ウブな女を一から育て、絶対服従までさせる楽しみが、何よりの至高であるのだ。ジャイロにとって、ルーシュは見た目も育ちも清楚さも年齢も、今までにないくらい最高の条件である。

興奮したジャイロは、ルーシュを雑に抱き上げ、ベッドに押し付けた。質のいい寝具はルーシュの身体に痛みを与えることはなく、軽くバウンドしただけだった。そのルーシュの身体に、ジャイロが覆いかぶさる。

「や、あ……っ！」

はっきりとした否定の言葉は出ないが、手でジャイロを押し返してしまう。そんなルーシュの抵抗も虚しく、パンツもずり下げられ、陰部を撫でられる。乳房に噛み付くジャイロの舌の動きと、女性器の入り口を撫でる指の動きで、ルーシュは錯乱した。局部が、熱く火照るのだ。知らない感覚だけれど、なぜか心地がよく、血管の中に巡っていく、変な刺激がある。

「あっ……あ、あ」

ルーシュはもう、口が開きっぱなしで、天井を見上げたまま、触れられている部分の感覚にしか意識が向かなくなっていた。

はあはあ、息を荒げたジャイロは、舌と指の動きを止め、ルーシュを見下ろす。

「こんなにすぐに感じる女は見たことがないな」

下卑た笑いを浮かべ、ルーシュに新しい衣服を一式押し付ける。

まだまだ調教のしがいがあるので、いきなりすべてを奪おうとしない。ジャイロは、あまりに性悪で、卑怯な男だった。

翌日から、ルーシュの目の中の光が消える。出された食事も、一切口をつけなかった。天蓋付きのベッドの上で、自分はいつ殺されるのかと、的外れな恐怖ばかり感じ、うずくまっている。ジャイロが任務により一日城を空け、帰ってくると、やつれたルーシュがベッドの上で弱って倒れていた。

「ちゃんと食事をしなさい」

ジャイロは、給仕の者に新しい食事を用意させる。シチューとパンが目の前に用意された状態で、もう一度「食べ」と、伝えると、ルーシュも食べ始めた。一度口にすると、食欲が刺激されたのか、あっという間に完食してしまう。続けて、ジャイロは用意していた液体の小瓶を出した。

「これは栄養剤だ。私はお前を殺したいわけではないからな」

同時に、小声で呪文を唱えていた。怪しい小瓶に入った紫の液体など、普通の感覚を持っていたら飲むことを躊躇するが、ルーシュは迷わず手を伸ばした。ジャイロの幻術により、怪しい色水が、浄水されたきれいな水に見えるのだ。パンで喉が渴いていたルーシュは

「ありがとうございます」と言って、飲み干した。ごくごくんと音を立て、ルーシュの喉が鳴る。

すべて飲み終えたとき、ルーシュは、胃の中から湧き上がる熱に気づいた。何かを入れられたのか、と一瞬だけ不安になったが、ふわふわと浮いたような感覚が気持ちよく、目を閉じてしまった。

ジャイロがルーシュに手を伸ばす。顔を引き寄せ、唇を合わせた。うっすらと目を開けたルーシュの認識は、「リバイス」だった。

「はあ、あ……りばいす……」

微笑んだリバイスが、ルーシュに口付けをくれているのだ。舌を入れ、中をねっとりと舐めまわされた。ルーシュは、一瞬前までの意識が吹っ飛び、リバイスから触れ合いを求めてくれたことへの歓喜しかなくなっている。ジャイロが唱えた呪文は「幻術」を掛けるものだった。

「んっ、ふう、う」

上顎の粘膜を舌で撫でられると、背筋がビクンと跳ね、鳥肌が立つ。よだれが垂れて、糸を引いて乳房に落ちていった。その乳房は、垂れた唾液を広げるようにして、男の手によって柔らかく揉まれた。ルーシュの乳首は既にビンビンに立っており、少し撫でられただけで感じてしまう。腰が砕けたように、座位すら保てなくなり、ルーシュはベッドに倒れた。当然、男もその身体に密着した。

「んはっあ、はっ」

男の手は、さらに陰部にも移る。するりと下着内に侵入してきた指が、ルーシュの大陰唇を広げた。くぶりと音がする。ルーシュ自身も、その女性器から体液が垂れたことに気づく。「あああ……だめ、そんなところ……」

口で言いながらも抵抗はせず、むしろ、男に抱きついた。筋肉質の背中を撫でる手つきは、まるで十六歳のウブには見えないものだった。女としての性が、一気に開花したような、本能的な動きである。

男の中指が、ルーシュの体内に挿入される。ぬるん、ぬるんと、中の浅い部分で出し入れをしはじめる。膣口が開いては閉じ、また指が浅く侵入する。たったそれだけなのに、ルーシュは、膝をピクピクと跳ねさせた。男は、指にしっかりとルーシュの愛液をつけてから、その指をさらに奥へと進ませる。膣内をえぐるようにして一周、肉壁を撫で上げると、ルーシュの背が反った。

「ふああああッ！」

下腹部全体を取り巻くような刺激。ルーシュは、瞬発的に出てしまった自分の悲鳴の大きさに驚いたが、男の指は休まることなく、円を描くようにぐりぐりとルーシュの膣内をえぐるので、とにかく混乱した。

「あっあっあっ、あああっ、なにこれっ、ああああ！」

大きく開いたルーシュの口に、男は舌をねぶり込む。互いの舌を絡ませ、歯の羅列を舐めると、ルーシュの舌も積極的に動くようになった。クチュクチュ、涎の音が充満していた部

屋には、次第に別の水音も混じってきた。

男の指が出し入れされるたび、ぐっちょぐっちょと卑猥な音を立てる女性器から、愛液が漏れ出している。

「ふあ、あっ、りばいすうっ……んんんっ、は、あああッ！ ああっ、ん」

男はキスをやめ、ルーシュのまたぐらに顔をつける。立たせた膝を開かせ、中心の大陰唇を両手で開き、陰核に息を吹きかけた。

「はあうっ、あ！」

ルーシュは男の髪の毛を掴み、顔を撫でた。リバイスの頭ではないのに、ルーシュは、優しく、慈愛がこもったような撫で方をする。

「ああああ、あ、あああ、だめえ、そんな、あ、汚いよお……」

「気持ちいいだろう」

「あ、あああ、んっ……でもお……」

男の舌が陰核に乗せられ、ずるんとひと舐めされれば、膣口から愛液がピシャッと飛び出る。

「んひゃあッ！ あうッ」

吸い付くようにして陰核を刺激されれば、腰をくねらせ、甘い甘い声を出した。

「はああああ、あーっ……はあん」

男の手が足を支えていなくても、ルーシュの股は勝手に開くので、男は乳房に手を伸ばす。ツンと立った乳首を、ぬめりのついた指で撫でれば、ルーシュの身体は痙攣しはじめた。

「あん、あっ、ああああ、あっ、変なのっ、身体が……だめ、ああっ、それえっ」

ズズズ、と音を立てて陰核が吸われる。ルーシュは、脳内がはじけたような衝撃を受けつつ、身体が硬直した。「かは」と、か弱い声を出し、達したのだ。初めての絶頂で、意識が飛んでしまったルーシュは呆然と寝転んだまま。その身体を、男の手が丁寧に撫でていく。首から胸、胸から腰まで、べったりと手のひらを這わせ、肉感を楽しんでいた。内腿や女性器付近を撫で始めれば、絶頂で放心していたルーシュの意識が官能に戻ってくる。

「あああ、あ、だめ、もう……変になっちゃう、からあ……」

男は、ルーシュを抱き起こす。その目の前に立ち、ずるんと取り出した巨大な陰茎を見せた。寄り目になるほど凝視してしまうルーシュは、上目遣いで顔を伺う。何も言わない男は、ルーシュの頭を抑え、陰茎を口元に当てる。

「んっ……や、あ……りばいすっ……！ 待って……」

口を開いた瞬間に、陰茎が滑り込んだ。ルーシュの唇にぱんぱんに詰まった陰茎が、前後に動かされる。「ん、ふ」と、苦しそうな声を出しながらも、ルーシュは、硬い肉棒が口の中を犯す感覚に酔い、頬を染める。口内にも性感帯があるのだ。徐々に舌が動き出し、男のカリ首に刺激を与え始はじめた。

「うまいじゃないか」

「んっ、ううっ、ん」

もう、男が腰を動かさなくとも、ルーシュが自ら陰茎を握り、じゅぼじゅぼと口淫をしは

じめる。唾液によってぬめりがつき、ルーシュの手も扱くような動きに変わる。それを鼻で笑いながら見下ろす男は、ルーシュの頭を撫でる。

ルーシュは、嬉しそうに笑った。

「入れるぞ」

ルーシュも男も全裸になり、ベッドの上で抱き合う。まるでルーシュが潰されているような構図だが、ルーシュは、自分の身体を大きな男が覆っている肉感が心地よく、背中をじつとりと撫でてしまう。

「リバイス……」

男の手がルーシュの左腿に伸び、開かせるように動かした。従順に従うルーシュの膣口がくぱあっと開き、中の粘膜には、泡立った愛液が溜まっていた。迎える準備が万端になっている。太い肉棒が穴に当てられると、ルーシュは身構えた。唇を結び、来る痛みを我慢しようとして無意識に身体を強ばらせていたのだが、いざ亀頭が入り、カリ首、竿まですぶずぶと侵入されると、目を見開いてしまう。

「んああああッ！ あああっ！ あ！ はああッ、ひ、ぐっ、んんんッ」

痛みよりも、快感が強かったのだ。男の肉棒が膣壁を通るたびに感じる摩擦。カリ首のかたちまではっきりとわかる、ゴツゴツした硬さ。腹部がキュッと小さくなるような、直接的な快感で、思わず男の肩にキスをし、舐めた。

その瞬間、男は解除の呪文を唱えた。「あっああっ、あっ」と、喘ぎ続けていたルーシュが、男の頭を撫でるために手を伸ばした先で、止まる。

「えっ!? あっ、あ……っ」

首を上げた男の顔は、リバイスではない。下品に笑う、中年の男爵、ジャイロだ。剛毛な髭の向こう側から、はあはあとした息が出て、ルーシュに吹きかけられている。

「やっ、あっ、あああっ、あ、あああ!？」

やめて、と言いたかったはずなのに、ぐちゅぐちゅと音を立てながら繰り返されるまんこに意識が飛んでしまう。ジャイロの顔を凝視しながら、肉棒がまんこをえぐる、絶対的な気持ちよさを実感し、目がとろけた。

「んはっ、ああっ、ふあ、ああん、あ♡」

ジャイロの手が乳房に伸ばされ、激しく揉まれれば、ルーシュの身体が痙攣してくる。一度、陰茎がすべて抜かれ、また奥まで入れられると、白目を剥きそうなほどの強い刺激が走った。ビクビク、身体全体が痺れるほど震えた。

「ふあ、ああ、あっ、あっ、あっ！ ああ！ そこ、あっ、あ`あ`あ`♡」

ジャイロは、ルーシュにも聞こえるように堂々と呪文を唱えた。「絶頂するたびに恋愛感情を持つ」という、悪魔的な魔術である。同時に、細かく激しい微振動を送り込み、ルーシュの子宮口をいじめ倒し、発動の条件であるエクスタシーへと促す。

「あああああ、あ、あっ、あぐっ、あ……あーっ♡」

身体を大きく弓形にさせたルーシュのまんこが、キュッと収縮する。縮んだあと、緩んだ。確実な絶頂だった。人生で二度目の絶頂を迎えたルーシュの心臓が、ドクンと鳴る。単純な

肉体的興奮からの鼓動ではない、心がキュンとするような、甘酸っぱい気持ちになったのだ。

「あ……ふ、あ……♡」

やや朦朧とした意識の中、ルーシュは、目の前の男の顔を見る。無意識に、微笑んでしまった。

「あ、あ、ジャイロ、さま……」

「ふふ、ははははははは！」

絶頂するたびに、ジャイロを好きになってしまう身体になったルーシュ。それからの時間は、体位を変え、何度もまんこの奥を突かれ、十回近く絶頂させられる。

後背位で突かれれば、まんこの奥、子宮口にちんこが届き、苦しさすらある思い快感で、意識が飛んだ。対面座位で抱き合いながら、下から突かれれば、揺れる胸の中心がジャイロの胸筋に擦れ、乳首だけでも絶頂した。騎乗位で揺さぶられると、ルーシュ自ら腰を振りはじめ、自分で快感を得て、Gスポットで絶頂した。

やっと、ジャイロが射精したときには、ルーシュはもう、自ら喜んで精液を受け入れ、「ありがとうございます」と言っていた。

ルーシュは、ジャイロに激しく犯される日が続く。夜だけでなく日中に行為に及ぶこともあり、達した回数もうジャイロも数えていないほどだった。それでも、行為の時間が空けば、少しの怯えと嫌悪感を顔に出すことがある。ルーシュがリバイスを思う気持ちは大きく、いくら魔術を使えども、心は制御しきれず、ジャイロだけのものになるのは難しかったのだ。身体を嬲られればすぐに快感に狂ってしまうけれど、一度落ち着いてしまえば、ルーシュは故郷に思いを馳せていた。

今宵も、部屋に入ってきたジャイロに対し、ルーシュは身体を守るようにうずくまり、泣きそうな顔をする。少し身体を触れば、快感の波に心が動き、ジャイロの陰茎を求めるようになるのだが、それは身体が堕ちただけである。ジャイロは、ルーシュの服従心がまだ弱いことに、腹を立てていた。

気が狂うほどの快感を与えれば、身も心も堕ちて当たり前なのだ。そうやって、ジャイロは今までも何人もの女を完全奴隷に仕立て上げてきた。確実に服従する女のコレクションを増やしたいジャイロは、ルーシュと目を合わせながら、とある魔術を使うことを思いつく。

「私と勝負だ、ルーシュ」

「……勝負」

「ああ。貴様が勝てば、家に帰してやろうではないか！」

「ま、負けたら……私はどうなるのですか」

「私の思い通りに生きる傀儡となる」

ルーシュは、たとえ負けたとしても、心が折れない自信があった。ジャイロが自分に魔術をかけて、身体をおかしくさせていることには気づいている上で、完全に屈服していない自

分の心を誇っていた。もし、勝負に負け、どうしても逃げられない状況になったら、自ら舌を噛み切って死んでやろうと心に決める。

「勝負……します。させてください」

「はっははは！ ああ！ 勝負の条件は、これから三日間、私に絶頂を強請らなければいいだけだ！ いいか、絶頂したい、イきたい、イかせてくださいなどと私に言えば、貴様は完全に私の傀儡になるのだ」

「……それだけで、いいのですか」

ルーシュは胸を撫で下ろした。意識が平常のときは、身体を弄ばれ、強制的に絶頂させられるのは、苦痛と考えている。だから、三日間、ただ我慢をすればいいだけなのだ。ジャイロがルーシュに呪文を唱え、「絶頂できない魔術」を発動させるのも、当然のごとく、大人しく受け入れた。

「さあはじめよう。どこまで我慢できるか、見ものだな！」

ジャイロがルーシュを押し倒し、身体のかたちを撫でるようにして手のひらを滑らせる。衣服を脱がさないまま、丁寧に、乳房の膨らみや腰のくびれをなぞった。

「う……ッ、くふ……あふっ」

これまで、さまざまな魔術を掛けられ、薬物も飲まされ、身体の感度が上がっているルーシュは、これだけでも悶える。唇を結んで、目を瞑り、ジャイロから顔を逸らしながら、震える身体に我慢を言い聞かせていた。

「おや、もう声が出ているぞ？ さっきの威勢はどうした？」

ジャイロは、両手でルーシュの乳房を掴み、ぎゅうぎゅう揉み上げる。ベビードールと下着をずらし、生の肌に指が乗ると、ルーシュは首をキュッとすぼませて反応してしまう。すかさず、ジャイロの十本の指が乳肉に食い込んだ。下乳と横乳を掴み、左右を寄せ上げる。

「ふ、う……うう、んッ、ん」

ルーシュの乳腺を刺激するように動く指。左右から寄せ、谷間を密着させ、何分も何分もそればかりを続けた。ルーシュの息が荒くなっていく。乳全体の体温も上がり、じんわりあたたかい。乳首はビンビンに立ち上がっているが、そこには、まだ触れられていない。

ジャイロは、満を辞して、乳首に涎を垂らした。的確に落ちていく唾液が、右の乳頭部にとろりとかかる。

「あはッ！ ああぁっ！」

ルーシュがシャツを掴み、眉間に皺を寄せる。顔は真っ赤で、腹筋も激しく上下している。ツーツと乳輪に落ちていく唾液が、ピリピリと快感を刺激していた。

「ふふ、はははっ！ どうだ、気持ちいいだろう！」

ルーシュの悶える姿を楽しむように、ジャイロは丁寧に愛撫を続けた。ぬめりのついた部分に息を吹きかけると、ルーシュの顔が振られ、反対側を向き、また歯を食いしばる。垂れていく唾液が乳輪をぬめらせているので、そこに指を乗せる。触れるか触れないかの浅い密着で、やはり乳首には触れず、乳輪だけをくるくると撫でた。

「ううううう、う、うううう……んぐう……」

乳首がビクビクと動いているようだ。ルーシュは、確実に中心に集められている感度を自覚している。意地悪なやり方をするジャイロに怒りすら覚えながらも、三日間の我慢を強く誓い、身体を震わせている。

ジャイロの顔が、ゆっくりと落ちてきた。相変わらず、両手で乳を揉み上げながら、乳房の中心部に唇を寄せていく。ルーシュは、思わず顔を正面に戻し、ジャイロの顔を見てしまう。上目遣いのジャイロと目が合う。

「あ……ああ、あ、あ」

ニチャツ、とよだれの音を立てながら、ジャイロの唇が開いた。上下の唇がよだれの糸で繋がって、その中心から分厚い舌が出てくる。

「あ……だめ、だめええっ、今っ、そこお……あ、あ」

どんどん伸ばされる舌が、乳首のやや下方に触れ、ベロン！ と強く舐め上げられた。

「あッ、あ` あ` あ` あ` あ` あ` っ！」

ルーシュは、首をしならせて叫ぶ。ぶち上げられた快感が溜まっていた部分を舐められ、脳がとろけだす。ジャイロは、すぐに強く乳首に吸い付き、舌を素早く動かしながら吸った。ジュルジュル、よだれの音を大きく立てながら、左右の乳を強く寄せる。舌を高速で動かし、両方の乳首に同時に刺激を与える。

「んはああああッ、ああっ、ふえ、あ」

ルーシュの足が、キュッと締められた。膝が勝手に立ち上がり、もじもじと腰がくねる。ジャイロは、胸の舐めを続けながら片手を離し、股間に持っていく。下着の上から女性器を撫でると、布地を貫通した愛液でぬるついた。

「んあっ、あっあっあっ！ そっち、あっ、だめっ、あああッ！ やめ、あっ」

ジャイロは、布の上からクロッチ部分をずるずる撫でる。すべりのいい生地の上からでも、ルーシュのふわふわの陰唇の感覚がわかるのだ。膣口の周辺を丁寧に撫でていけば、ルーシュの足が勝手に開いていった。ずるずると、恐る恐る、しかし確実に、シーツの衣擦れの音を立てながら、「触ってください」と言わんばかりに開脚が進む。

「ほう？ おかしいぞ？ 足が開いたな？」

「あううっ、う、うう……あ、これ、は……ちが、ちがっ……」

ガクガクと膝を震わせながら、また閉じようとしているルーシュに、ジャイロはさらに振動を与えた。女性器全体を手のひらで覆いながら、細かく擦るように動かしたのだ。手の付け根部分の骨が陰核を鈍く擦り、刺激する。

「んひゃっ！ あああっ、あ、ああうっ、あ！」

下着越しなのに、ぐちゅっと音がする。ジャイロは、鼻で笑いながらルーシュを見下ろしてから、顔を下腹部に下げていく。身体を舐めながら、股間まで到達すれば、下着を脱がせる。ルーシュは、もう身体に染み付いた動きのように、足をがばっと開いた。ペトッと音を立てながら陰唇が開き、膣口の粘膜が丸見えになるが、ジャイロはまだそこには刺激を与えない。指で小陰唇を伸ばし、中にある小さな陰核に吸い付く。

「ッは！ あっ、ふあっあああッ！ やめええええッ、あああ！」

ルーシュの股間は、限りなく熱くなっていた。渦巻いた熱が溜まり、早く、もっと強い刺激を欲しがっている。ジャイロは優しい刺激しか与えないので、陰核がどんどん硬く大きくなっていくとも、物足りない。

ジャイロが舌を高速で動かし、ブブブ、と震動音を立てながら吸い上げると、悶えるルーシュの膣口から愛液がどろりと垂れる。

「はーっ、はあー、あっ、ああああっ、はあーっ」

天井を向いたまま、口を半開きにしたルーシュは、自分のまんこがピクピク動いていることに気づいている。陰核を舐められ、刺激を与えられるたびに、膣口が締まったり緩んだりしていた。

ジャイロは、満足そうにルーシュを眺めた。ひくひく動いているまんこが、何を欲しがっているのかも知っているが、与えない。ただ、ルーシュが呼吸をするたびに漏れ出ていく愛液を眺め、ニヤついた。

「では、私は仕事があるのでな。一旦離れよう。よかったな、それでも三日間の制約は変わらない。随分と優しい勝負だろう？」

自分の口元を拭ったジャイロが、ルーシュの元を離れる。ルーシュは、火照った頬で、目をとろけさせながら、小さい声で「待って」と言った。

「なんだ？」

息を荒くし、ジャイロの目を見つめたが、ルーシュは口を結んでしまった。口角をあげ、無言で頷いたジャイロは、ベッドの上に玩具を用意する。ジャイロの陰茎よりは小さいディルドと、魔力で振動するローターだ。

「物足りないなら、自分で慰めろ。私にイかせてくれと言わなければいいのだからな。ひとりで遊ぶ分には自由だ」

ジャイロが部屋を出て行ってしまふ。残されたルーシュは、熱を持ったままの身体で寝転んだ。寝てしまえば、すぐに時間が過ぎると思ったのだ。

しかし、疲れているはずの身体が、どうにも眠りに落ちない。気づけば、股の間に枕を挟み、フウッ、フウッと小さい息を吐いている。シーツが身体に擦れる刺激が心地よい。

無意識のうちに、手が自分の乳房に伸びていた。ふわりと柔らかい自分の肉を撫でると、ため息が出た。すぐに仰向けになり、両手で左右を揉み上げ、乳首に触れる。

「あひ、ああああ……っ、やっ、私、わたし、こんな……」

人差し指で乳首を何度も擦れば、脳に響くような刺激を得られる。自分のおっぱいをいじりながら、ルーシュの口元が微笑むようにゆるんだ。股に挟んでいた枕はどさりと音を立てて倒れる。片手を股間に滑り込ませると、愛液のぬるつきに驚いた。

「あっ、あああっ、こんな……こんなに」

自分の指で陰核を潰し、撫でる。どうすれば気持ちよくなれるかなんて、自分の身体が一番知っていた。

「んひゃあっ！ あああっ！ あう、あ！」

身体を弄る手の動きは激しくなるばかり。ジャイロに教え込まれた気持ちよさを模倣し

ようと、指の腹を陰核に押し付け続けた。けれど、ジャイロから愛撫されたときのような快感には届かない。

欲しい。もっともっと強い快感が欲しい。これしか考えられなくなっていたルーシュは、置かれたディルドに手を伸ばす。寝転びながら膝を立て、ガバッと足を開き、恥ずかしげもなく挿入した。

「おっお、お、おっ、はあっ……」

ずぶずぶと入っていくディルドの感覚に、期待が高まった。このままここで絶頂をすれば、ジャイロにはバレないはずだ。そう考えたルーシュの脳内は、イけない魔術についてのが消え去っている。

「早くっ、早く、戻ってくる前に……っ」

自分で抜き差しをすると、ぐちゅぐちゅと音が鳴る。膣内がえぐられる感覚は、待ち望んでいたものなのに、気持ちいいのに、足りない。何度も挿入されたジャイロの陰茎よりも小さく、無機質で、物足りないのだ。

ディルドが届く一番奥まで突っ込んでも、欲しい刺激にはならない。絶対に、いつもならこの動きでも絶頂できているはずなのに、何度突っ込もうとも、足りない。

「うっ、くう、ううううっ、ぐ、う……」

ピリピリと、細かい感度が膣内を犯していた。これを持続すればイけるかもしれない、もう少しやればイけそうだ、というくらいまで悶々と感度が高まっているのだから、ルーシュは手を動かすしかない。愛液は溢れ、ルーシュの手にもまで垂れているのだから、もうすぐのはずなのだ。

「はあっ、はあっ、なんでえ……なんで、なんでえ」

ローターにも手を伸ばし、ルーシュはうつ伏せになる。膝を立てせ、腰だけを高く上げた状態で、肩と胸で上半身を支え、股間にディルドを挿し、陰核にローターを当てた。

「んぐううううッ、あっあっあっあっ！ ああ！ い、いけそっ、ああああ！」

じゅぶじゅぶ、激しい抜き差しの音。細かい振動を繰り返すローター。ふやけきったルーシュの性器からは泡立った愛液が垂れ落ち、ベッドのシーツに大きなシミを作っている。

けれど、どうしても達することはできない。

「んはあっ、はあっ、ああああ、あ、もっと、もっと……もっと」

何分も続けていても、あともう一步のところまで留まるだけだ。疲労が溜まり、ルーシュはどさりとベッドに横向きに倒れる。けれど、溜まった肉欲が解放してくれることはなく、自慰をやめたのにもかかわらず、脳内には「イきたい」の四文字しかなくなっていた。

ジャイロの野太い陰茎で、激しく突かれない。大きな声で喘ぎ、開放感が欲しい。涙を流しながら、絶頂の感覚を求め続ける。

今までにしてきたジャイロとの行為を思い出し、また自分の股間をいじるルーシュ。目を瞑り、ジャイロの手だと思いながら自慰行為を進めると、胸がドキドキしはじめた。脳裏にジャイロの顔が浮かびはじめる。

「あ、あ……ジャイロ、さま……ジャイロさまの、おちんちんじゃないと……だめ……うっ、

んん、っふ」

奴隷といえど、優しくしてくれている思い出しかないじゃないか。ルーシュを気持ちよくさせてくれている。なんて優しい人なんだろう！ と、ルーシュは、膣内を指でぐちゅぐちゅ撫でながら、考えていた。

夜が明け、二日目の昼を迎えた。ジャイロがルーシュの部屋を開けると、ベッドから声が聞こえる。

「ああっ、あ、ああ……ふ、あ♡ あゝ ツあゝ ツあゝ ツ、これっ、これ……もっと、ああっ！」

ルーシュは、愛液でベトベトになったディルドを抜き差ししながら、多量の汗をかいていた。シーツのところどころに愛液のシミがあり、シワが寄ってぐちゃぐちゃだ。

ジャイロの姿を確認したルーシュは、ふにゅと微笑んで、ふらふらになりながらもベッドから降り、近づいてくる。ジャイロの足元にひざまずき、はあはあと息を荒げ、衣服をずらして陰茎を取り出す。それを無言で見つめているジャイロは、満足感でほくそ笑んでいた。

「はあっ、ああん、ジャイロ様……ジャイロさま、お待ちしてました……」

ぶるん！ と出てきた陰茎を下から舐め上げ、焦りながら喉の奥まで突き刺すルーシュ。ズブズブと激しい音を立てながら、舌をべろべろと撫でまわすような口淫を始めた。

「なんだ？ 貴様は」

「ふあっ、あ、ジャイロ様……に、ご奉仕を……」

「なぜ？」

「あ、ああ……私が、ご奉仕を、したいからです……」

「見返りを求めているか？」

「ん、あっ、あ……も、申し訳ありませんっ！」

すぐに床にひれ伏し、頭を下げ、謝るルーシュ。ジャイロは、大声で笑いながら、ルーシュをベッドに乗せた。目をハートにする勢いでジャイロを見つめているルーシュは、早急に足を開いた。喜び、泣きそうな顔になっている。そのルーシュのまんこに、ジャイロが太い指を突っ込んだ。

「あああああっ！ あああ！ ジャイロさまのおっ、ゆびいっ！」

「指でいいのか？」

「あっ、んぐっ、はあ、あっ、や、あああ！ いやああ！」

「何がほしいんだ？」

「あにゃあっ、あああ！ ジャイロさまのっ、おちんちんでえっ、イかせてくださいいいッ！」

「ふははははは！ ああ！ いいぞ！ ではその前に、傀儡の契約だ！」

「はやく……早くう……♡」

ジャイロは、部屋の中心にルーシュを移動させ、寝かせた。うっすらと床に彫られていた魔法陣が、ジャイロの呪文とともに光り出す。ブツブツ呪文を唱え続けながら、ジャイロは

自分の人差し指を噛み、血を出した。さらに唱え続けながら、指先をルーシュの下腹部に乗せ、器用に古代文字を描いていく。

「はあ、んうふッ」

子宮を外部から押されているルーシュは、疼いて疼いて仕方がない。早くちんこを挿入してほしい……としか考えられていなかった。

時間を掛けて、ルーシュの子宮部分に術式がすべて書かれる。ジャイロは、目を瞑り、集中して早口で呪文を唱えはじめた。ルーシュの身体が熱くなっていくにつれ、彼女も「あっあっ」と、声を出す。

ジャイロが古代語にて、「我を主人とし、主人の命令には逆らわず、命令は絶対である、服従の傀儡と化す」と唱え終わると、ルーシュの子宮に書かれた文字がシュウウと音を立てた。蒸気を発生し、文字が浮き、紋様が変わっていく。煙が落ち着いたころには、ルーシュの子宮部分には、淫紋が刻されていた。

「私の傀儡よ、ベッドに乗りなさい」

「はい」

とろんと蕩けたままの目で、ルーシュは歩き出す。自らベッドに寝転び、じっと天井を見上げた。

「足を開け」

「はい」

「自分で足を抑えろ」

「はい」

くばあ、と膣口が開く。限界まで開かれた足の中心、ピンク色の粘膜を持つおまんこが、ジャイロの固い陰茎を待ち望んでいた。ピクンピクンと、膣内の肉が動き、我慢ができないと言っていた。

「ふふふっ、ははは！ では、私の陰茎を入れてやろうではないか！」

「ああああんっ！ ありがとうございます……♡」

ジャイロは、イけなくさせる魔術を解く。術が解かれた瞬間、ルーシュに蓄積していた快感が弾けそうだったが、ジャイロは、それと同時にルーシュのまんこにギンギンのちんこを突き刺したので、爆発に近いような衝撃になった。

「あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝッ♡うゝうゝあッ！」

一気に、最奥まで、真っ直ぐに入れただけだ。しかし、ルーシュはそれだけで、激しく身体を痙攣させ、一瞬で達する。

「あひ、あっ、あ、ああ、あ……これえ……これ、あゝあゝあゝん、は♡ ご主人様のおちんちん……ああ♡」

ビクンビクンと足を震わせながらも、自分で掴み抑えている手はやめない。白目を剥き、待ち望んだ快感に喜び、よだれを垂らしていた。

ジャイロが悪趣味な奴隷作成を進めている間も、ルーシュの故郷とジャイロの帝国の戦争は過激化していた。田舎の城の近衛兵であるリバイスすら、正規の兵士として戦に駆り出される始末だった。

両国の最終決戦のとき。もはや、帝国側の勝利は決定したようなものだが、リバイスが属する国は、帝国思想に抗う姿勢をやめない。降伏をすれば死人が減るにも関わらず、無謀な歩兵を送り込む。兵士たちとて、野蛮な帝国のいいなりになりたくない気持ちは強く、士気は高い。帝国側に勝手に降伏し、寝返っていく兵士もいたが、リバイスは最後まで粘った。

自分が国を捨ててしまったら、行方不明になったルーシュが帰ってきたとき、悲しむだろうと思っているのだ。ルーシュのためにも、自国を守りたい気持ちが強く、自分たちよりも数段固い鎧を身に纏った兵士にも、果敢に攻め入った。

しかし、多勢に無勢というもの。あっけなく終わってしまった最終決戦。戦場となった荒野で多くの血が流れる中、リバイスは足を負傷し、空を見上げていた。

「ルーシュにはもう会えねえのかなあ……」

薄れる意識の中、見上げた空が故郷のものに見えていた。

次にリバイスが目を覚ましたのは、豪華絢爛な城の中だった。足の負傷は雑に手当てされ、腕を縛られ、鉄の首輪をつけられ、繋がれている。固い床の上だ。リバイスは一瞬で察知する。捕虜になってしまったのだ、と。

自国が敗戦してしまったなら、リバイスのような兵士の捕虜は殺されるか、服従を強いられるか、どっちかしかない。穏やかに町民として生きていけることなどないとわかっている。故郷の景色、ルーシュの姿を思い出し、舌を噛み切ろうとした。が、一抹の希望を捨てることはできず、留まる。

ふと、隣で虫の息になっている、同国の兵士が起きたことに気づいた。彼はほとんど動けないようで、鎖で繋がれてもいない。どうせ死んでしまうのだろうと思ったので、リバイスは、自分の故郷について勝手に語りはじめた。長々と、幼少期からの思い出ばかり。

「ルーシュっていう幼馴染がさ、いつか帰ってきたら……俺がいないって、心配すんだろうなあ……」

下を向きながら、聞いてもらえているかもわからない身の上話を終えると、リバイスの元に、身なりのいい、兵士ではないような男がやってくる。冷たい視線でリバイスを見下ろし、首の鎖を持った。

「なんだよ!? どこ連れてくんだ!」

いよいよ殺されるのか、拷問で降伏を促されるのか……恐怖があったリバイスは、自分の弱さを隠すために吠え続けた。ずるずると引っ張られ、放り込まれたのは、広く、天井の高い大広間だ。玉座のように立派な椅子があり、帝国の紋章が刻印された壁。「おい!」と、叫んだ声が大きく反響したので、リバイス自身が戸惑った。

部屋の中心にひざまずかせられたリバイスは、大きな椅子を見つめた。数秒の静寂のあと、カツカツ、靴底の音を響かせながら歩いてきたのは、帝国のナンバーツーであるジャイロだ。彼の悪名高さを知っていたリバイスは、顔を歪める。捕虜になるのなら、まだもっと、

ほかの公爵の方がよかったと思った。

「なんだよ！ 俺をどうするつもりだよ！」

リバイスは、果敢に叫んだ。椅子に座ったジャイロは、眉を上げて満足そうな顔を浮かべながら、パンパンと手を叩き、「来なさい」と言った。リバイスがそのまま顔を上げ続けていると、なんと、数ヶ月探し回り、恋焦がれた女が、破廉恥な衣装を着せられ、歩いてきたのだ。

「ル、ルーシュ！！」

声の限り叫んだ。なぜルーシュがここに？ なんて、今はどうでもよかった。生きて、また会えたことに胸が高鳴り、顔が晴れた。けれど、ルーシュはリバイスを見て軽く微笑んだだけだ。

同じように再会を喜ぶだろうと勝手に確信していたリバイスは、息が詰まる。

「えっ、は……？」

そのまま、ルーシュがジャイロの膝の上に座るではないか。微笑んだまま、ルーシュよりもふたまわり以上大きい男の膝に、ちょこんと座っている。人違いか？ と思ったが、いや違う、絶対にルーシュだ。けれど、何かがおかしいことはわかる。

「ルーシュ、何してんだ、おい……」

「やはり、この傀儡と同郷の男か」

「く、くぐつ……って、は？」

「ルーシュ、葡萄酒を」

「はい」

ジャイロは、わざとらしくルーシュに命令をした。給仕の者がトレイに乗せた葡萄酒を持ってきたので、ルーシュがそのガラス食器を手に取り、ジャイロの口に持っていく。嬉しそうに、ジャイロの口元から少し垂れてしまった酒を、ペロペロと舐めてきれいにした。

「あっ、は……てめ、おい！ てめえ、ルーシュに何をしたんだよおっ！」

何か弱みを握られ、無理やりに従わされているだけだ。そう考えているリバイスは、自分の拘束具を壊そうと、力を込める。鉄製の鎖も首輪も、外れることはないが、リバイスの血管はどんどん浮き出していた。

「何を……？ そうだなあ？ いやあ、私は別に……？ 君の幼馴染が私に心酔しているだけだがね」

「んなわけが……あるかよ……！」

「ほう？ では見るがいい。ルーシュ、その下賤な男に、胸を揉んで見せてやりなさい」

「はい」

リバイスは、ルーシュの動きから目が離せない。ジャイロの片足に跨って座ったルーシュが、リバイスに身体の正面を向け、両手で乳房を揉みはじめたのだ。寄せあげるように、胸の膨らみがよくわかるように。

「んはっ、あ、あ♡ リバイス、見て……」

「やめ、やめろ……ルーシュ、やめろよ……」

リバイスは、信じられない光景を見たくなくなった。まさか、やらないよな、と思っていたことを目の当たりにさせられた。さらに、ルーシュは、自分のこともしっかり認識しているのだ。ルーシュの変わり果ててしまった姿から目を逸らし、首が項垂れる。

「なんで……なんでこんなことに……」

「真実は、ルーシュの口から聞くとよい。さぁルーシュ、どんな生活をしているのか、話してやれ」

ジャイロの促しのあと、ルーシュは頷き、胸を揉む手をやめないまま話しはじめた。

「ご主人様は、悪い人たちに拉致された私に優しくしてくれたの。あんな田舎で畑仕事をしているだけだった惨めな私に、すごく可愛い服を着せてくれて、おいしい食事をくれた……こんなことってある？　ないよね、すごいよね。私、故郷が好きだと思ってたけど、違ったみたいなの。本当は、こういう豪華なお城で暮らすのが幸せなんだと思う」

ルーシュの言葉は、リバイスにはまるで信じられない。毎日、幸せそうに家畜の世話をし、畑に手間暇をかけていたのだ。都会に憧れていた姿なんて、一度たりとも見たことがない。

「そんなわけねえだろ……何言ってるんだよ、ルーシュ、思い出せよ！　飼ってた仔牛だって、可愛がってたろ！」

「仔牛？　可愛がってたとしても、牛なんて、高貴なお方のお口に入るのが宿命だよな」

「は……？」

「私ね、女としての幸せを知ったの。ご主人様に教えてもらったんだ……ねえ、リバイスはしたことある？　セックス」

「待て、何言ってる、お前」

おっぱいを揉みしだきながら、ルーシュの頬が赤くなっていく。乳首を指で擦る仕草が、リバイスの目にも届いた。はぁはぁ、荒い息を吐きながら、ルーシュは恍惚の表情をした。「ああ……ん♡　すごいんだよ、ご主人様の、おちんちん……私がね、なんの知識もなかったのに……ご主人様の手でおっぱいを触られれば、身体があっつくなるの。キスをしてもらえると、口の中がとろけちゃうの。おまんこに指を入れられると、ぐちゅってして、いっぱい、エッチなお汁が出てくるの……♡」

リバイスは、口を開いたまま、呆然とするしかなかった。ルーシュが発する単語がすべて、異次元のものに聞こえる。おっぱい、おまんこ、おちんちん。ルーシュが大人になったとて、発するような言葉ではないのだ。ルーシュは、そんな女ではなかったはずなのだ。

「ご主人様はねえ……はぁっ、まだ未熟だった私の身体をゆっくり、開発してくれた……おっぱいのはじの方からいっぱい触ってくれて、ちくびを舐めてくれて……ちゃんと気持ちよくなれるように、準備してくれたの……すごいことよ、だって私、初めてご主人様のおちんちんが入ったとき、痛くなかったんだもん。痛いなんてなかった。お腹の下の方がキュウってちっちゃくなるみたいなの、ギュッとおちんちんを離したくなくなるような……ああ♡　思い出すと、もう……んっ、あ」

ルーシュは、片手をジャイロの股間に伸ばす。服の上から撫でて、かたちを確かめた。指先はしなやかに、慣れたように動いている。

「私が……自分ひとりでエッチなことをしててね、どうしてもイけないことがあって、泣いちゃったときなんか……ご主人様はね、私に魔法をかけてくれたの。身体がちゃんと喜べるように、すごいの、魔法を使えるんだよ。リバイスは、使えないでしょ……んは、あ♡ ご主人様のおちんちんがほしくてたまらなくてね、でもご主人様はお仕事があったから、お忙しい方だから……私、ひとりでおもちゃを入れてイこうとしたのに、イけなくてね、本当につらかったの……けど、やっにご主人様が来てくれたときね、私がつらいのをわかってくれて、ちゃんとイけるように、先に魔法をかけてくれた……これ、このお腹の印、かわいいでしょ。それで、私、ご主人様におねだりをしたの。おちんちんをくださいって。おもちゃなんかじゃイけなかったからね、ご主人様のおちんちんなしでは生きていけなくなっちゃってるからね……ご主人様、お優しいから、私のおねだりを聞いてくださった。私が自分で足を持って開いた真ん中のね、おまんこに、ずぶって入れてくれたの……♡ もう、ああ、すごい……私、一瞬でイっちゃったの！ あんなの初めて！ 頭が一瞬で真っ白になってね、ふわって身体が止まって、ジンジン痺れて……おまんこの中に入ってるご主人様のおちんちんのかたちがあ、すごくわかるの……！ だから私言ったの。ご主人様のおちんちんをもっと気持ちよくさせたいですって、そしたらね、ご主人様も私のおまんこを気に入ってくださってるって！ すごい、愛ってこういうことなんだって思って……私、感動した。愛されなくてもいいの。私のご主人様を愛してれば、それで幸せ。こうやって、ご命令をしてくださってるのも、ご主人様が私を可愛がってくださってるってことだからね……ああ、んっ♡」

ルーシュは、ジャイロの足の上で悶えはじめた。行為を思い出し、まんこからは愛液が出はじめ、ぬるついている。徐々に、ルーシュの腰が前後され、ジャイロの足にまんこを擦りつけはじめた。

「んはっ♡ あゝ あゝ あゝ あゝ ツ、ふ、あッ、く……ふ」

「肛門で感じた話もしてやりなさい」

「んはあ、はい♡ ああん、あの、リバイス、あのね、私、お尻のね、穴に……今も、真珠が入ってるのお……ご主人様の魔法で、時々ブルブルって震えるの……んう、はあ！ あゝ うゝ ツ、は……前にねえ、ご主人様が、私のお尻の穴にいっぱい真珠を詰めてくれてえ……そんな汚いところ、高貴なご主人様に触らせるのはあ、だめって思ったんだけどね……真珠を入れてもらったらきつもちよくて……♡ いっぱいぎゅうぎゅうに入れて、それから、んふって私が出すの……ポロンポロンって出てくる瞬間がね、もお……すごいんだよお♡ それをしながら、おまんこをおちんちんでゴリゴリしてもらおうと、もおね、天国に行ったみたいな気分にい……あっは、は♡ ふう、ツんゝ！」

ルーシュは、まんこを擦り付けながら、おっぱいを揉む。満足そうな顔をしているジャイロが、後ろから手を伸ばし、ルーシュの片乳を揉むと、「んゝ はあゝ！」と、一層大きな声を出した。

「もう、やめてくれよ……やめろよ……」

リバイスは、もう吐きそうなくらいの嫌悪感である。魔術の効果がどこまでのものなのか

もわからないリバイスは、とにかく、ルーシュの本意ではなかったと信じて、かわいそうだと思うことしかできない。今も、ルーシュの本心ではなく、そういうふうに操られているんだ、と確信しているが、ルーシュの口から語られた事実打ちのめされ、目頭が熱くなった。ルーシュの方を見ることさえできない。

「リバイスう、ねえ、お口で、おちんちんしゃぶってもらったことある？ 私ね、ご主人様のおちんちんの味がだあいすきでねえ……ッ♡ だってえ、ザーメンじゃなく我慢汁だけでも、甘くっておいしいの……トロンって、おちんちんの先っぽから出てくるのね、ぬるぬるして、お口の中に広がるの……もう、ご主人様のおちんちんが目の前にあるとね、しゃぶらずにはいられなくて……前ね、私がどうしてもってお願いして、顔に出してもらったことがあるんだけど……私ね、ご主人様がすっごく気持ちよくなれるように、たまたまからゆっくり舐め上げて、棒の部分も全部舐めて、すっごく頑張ったの。喉の奥に突き刺すと苦しくなるんだけど、ご主人様が気持ちよさそうだからね、私、なんでもしてあげたいんだあ……♡ いっぱいいっぱいよだれを出してね、グチュグチュにして、ズボズボお口で扱くとね、ご主人様のおちんちんの血管が、ドクドクしてくるのお……先っぽのカリもどんどんはっきりしてきてね、天井を向くくらいすっごく勃起上がって、かったいの……♡ 私が一生懸命しゃぶるとね、ドピュ！ って出てきて、お顔がザーメンまみれになって、あまーい匂いがするんだよお……あゝ ふっ、ん♡ 私、我慢できなくて、お顔にかかったザーメンをいっぱい舐めるの……舌が届かないところは、指で掬ってね、全部舐めて……それでえ、ご主人様は絶倫だから、まだ勃起上がるのお……私にね、騎乗位で腰を振れって命令してくれるの♡ 私が自分で気持ちよくなっていいんだよお……ものすごい、贅沢でしょう……？ もう、あゝッ、あ♡ ダメエ、思い出すとお、腰があゝ……お腹が、ツん、は、あゝ あゝ あゝッ、イゝ っっちゃう、あゝ！」

ルーシュは、まるで騎乗位をしているみたいに、ジャイロの上で激しく動き出す。リバイスの位置からも、ジャイロの足に愛液が垂れているのが見えるくらいだった。リバイスはもう見ていないが、多少、クチュリと生じる水音は、耳に入ってくる。

「やめろ……もう……聞きたく、ない……」

「こらこら、ルーシュ、少し激しいぞ。ちゃんと話しなさい」

「はあ、い……すみません、あつ、ん……あのねえ、私ねえ、ゴッ、主人様に抱いてもらうために生まれたんだと思うの……こんなにつ気持ちいいこと、教えてくれたんだよお……命令してくださるの、全然、悪い意味じゃなくてね、私が気持ちよくなれる命令しかないんだよお……？ だって、私、ご主人様のためならなんでもできるんだもん……ッ！ ご主人様が絶対だからあゝ……あ、あれえ、リバイス、そういえば、ここに何しにきたの……？ もしかして、私を連れ戻しにきたの……？ 変なの、私幸せなのに、リバイスが私を連れ戻すのは変だよねえ、あゝ あゝ あゝッ♡ ん、は……ふうっ、何言われたって、私はご主人様のおそばから離れないよ……んぐ、ふう、あゝ♡ あゝ っ、ぎもちッ……！」

ルーシュは、ジャイロに抱き寄せられ、身体を預ける。自分で秘部に指を伸ばしはじめ、服の上からまんこをすりすりと擦った。痙攣しているようにビクビクと動いているルーシ

ユの腰は、セックスでの動きそのものである。黒目がグルンと上を向き、口を半開きにして  
いるルーシュは、清楚さのかけらもなくなっている。

「この、クソ……クソ野郎……ッ！」

目に涙を浮かべ、涙袋を真っ赤にさせているリバイスは、ジャラジャラと鎖を鳴らした。  
ひざまずいていた姿勢を崩し、鎖が伸びる限りは椅子に近づき、手を伸ばす。グン！ と突  
っ張る鎖に阻まれ、首が鞭打ちになりそうなくらいしなっても、目を血走らせていた。

「ルーシュを……ルーシュを返せ……！ このやろ、う……」

数メートル距離がある場所から、リバイスが必死に手を伸ばす。指先は震え、全身も怒り  
によってわなわなと振動していた。反面、表情はとても悲痛そうで、眉を下げている。

「リバイスう……？ 何したって無駄だよお、私にご主人様のことを好きなんだもん……  
ご命令は、私が幸せになるためのものだもん……リバイスは、小さいお城で頑張って守備を  
してるから、関係ないでしょ……？」

「もうそんな城ねえんだよ！ その外道に潰されたんだよ！」

「お城、ないんだあ……んはあ、あ♡ そっかあ、んッでも、リバイスもお、気持ちいい  
こと覚えたら、幸せになれるよお……♡ 私はご主人様のものだからしてあげられないけ  
ど、誰か見つかるといいねえ……あッ、はあ♡」

「というわけだ。よい土産話になったか？ 最後に会えてよかったじゃないか。感謝しろ  
よ」

ジャイロは、ルーシュをそのまま抱き上げ、高笑いをしながら歩いて行った。

「待て！ おい……待って……待ってくれよ、なあ……ルーシュ……」

鎖を鳴らしながら、リバイスは手を伸ばし続ける。ジャイロに抱き上げられたルーシュ  
が、ジャイロの肩越しに「バイバイ、リバイス」と呟いた。リバイスは、自分の視界がうる  
けているので、もうルーシュの顔を確認することはできない。だから、ルーシュの片目から  
涙がポロッと落ちたことは気づかなかった。

ガクンと膝を折り、平伏すような姿勢に戻るリバイス。負傷している足の痛みなど、もう  
何も感じなくなっていた。

「お願いします……神様、ルーシュを、ルーシュを戻してください……お願い、します……」

ぶつぶつ呟いていたリバイスの首の鎖が引っ張られる。大広間の奥の部屋へと引っ込ん  
でいったルーシュと、大広間から出されて捕虜の中に放り込まれるリバイスの間には、超え  
られない壁があり、距離もある。

何より、もう心がつながることはない。